

「住み分けの橋」

喜多川雅人

「それでは出かけるとするか…」と、健一。

秋空が澄み切る十月最終週の金曜日朝七時半である。二泊三日の山荘滞在に入用なものを詰め込んだ大きめのデイバッグを背負い、ボストンバッグを右手に、シモキタの自宅の車庫に向かいながら、連れ合いに聴こえるように呟いた。

「食料品の袋を忘れないでね…」という連れ合いの尖った声に無言で頷く。

芳川家の主・健一は八十五歳、老妻の麻沙子は八十歳。愛称は「ケン」と「マコ」だ。半世紀以上一緒にいる二人だから、阿吽の呼吸で物事は処理され、会話は少ない。もつとも、話好きのマコは一人でぶつぶつ喋っていることも多い。ボケが始まったのかもしれない。

荷物を積み終わると、井の頭通りから甲州街道を経て、中央自動車道に乗った。小淵沢まで二時間余りのドライブだ。愛車はH社のGRACE。グレース・ケリーの大ファンだったケンが選んだ小さな乗用車だが、子供や孫たちが一緒に乗ることもなくなったから、これでなんら問題ない。

途中の休憩で、運転はケンからマコに代わって、十時には小淵沢に到着。ここから八ヶ岳高原道路を五分上ったところを左折して、原村に向かう鉢巻道路に入り、二百メートルほど走って、八ヶ岳南端の編笠山麓を下る細い溪流を渡った。そこに掛かる小さな橋が山梨と長野の県境だ。

秋の柔らかい日差しが、車窓に流れる唐松林を縫って差し込むなかを、さらに五分余り走って、芳川家のログハウスに辿り着いた。

海拔一二〇〇mから一三〇〇mの一带は、遥か彼方に富士山を望めるので、

「富士見高原」と呼ばれる。湿気が少なく快適な別荘地だ。

航空会社で働いた現役時代、駐在したヘルシンキで親しくなったログハウスの業者の勧めで、太いフィンランド産の角ログの平屋を建ててもらったのが、三十年前。真夏でも二五℃を超えない気候が似ているのか、傷みがなく維持も楽で、以降、都会と高原の住み分けが始まった。現役時代から、平均して月二回は山荘を使っているから、芳川家では、前掲の橋を「住み分けの橋」と称している。

富士見高原の別荘地には、二百世帯ほどで構成する緩い親睦団体がある。八ヶ岳山麓の自然と文化を愛する人たちがばかりだ。皆さんの職種は多岐にわたる。絵画、工芸、陶芸等々、趣味とはいえプロ並みの男女が多い。

お盆の時期には、作品展や音楽祭も行われるものの、個性ゆたかな人たちが多いからだろうか、親しいなかにも、あまり深く他人に干渉しない空気はある。

山荘に着くと、隣の石岡夫人が車でどこかに出かけるところだった。

「あら、お久しぶり、お元気そうで…」と、マコ。

「これから富士見町のスーパーまで買い物です」と、石岡夫人。

「ご苦労様です。町のスーパーで宅配を始めたらしいですよ。ところで、我が家のことですけど、いよいよ山荘を引き上げるの。店じまいってところね。息子たちが使うらしいから、売りはしないけど、わたしたちは、東京の家を処分して、伊豆の高齢者向け施設に入ります」

「向こう隣の白井さんもそんなことを言っていましたよ、代替わりですって…。白井さんは、諏訪湖の高齢者施設にお入りになるとか…。二人ともお喋り好きだから、いつものことだが止まらない。

それを脇に見て、ケンは何物も黙々と山荘へ運び込んだ。車から玄関までは

十五段の下り階段だ。傾斜が緩いとは言え、八十歳を越えた今では、途中で二度も休む。情けない。

寝具や食器、家具類はほとんど残していくから、二人の衣類、洗面道具、趣味のコレクション等を、数個のダンボールと大型のポストンバッグに詰め込めば、事が足りる。

これはどうする？あれは捨てる？もったいないからやっぱり持って帰るか…と呟き、呻吟しながら、二泊三日で帰る頃には、なんとかけりが付いた。

最後の夜には、別荘族の早目の忘年会があった。晩秋には、凍結防止のため、水道から完全に水を抜いて下界に戻る。別荘村は翌春まで休眠するのだ。八ヶ岳山麓にスキー場ができた二十年ほど前からは、一年を通して使う別荘族もちらほら現われたが、少数派ではある。

…というわけで、紅葉が終わると、十一月初めの文化の日前後に、「水抜きパーティー」と称する早目の忘年会がある。

パーティーで皆さんに別れを告げ、三日目の朝、森の中のテラスで大きく深呼吸、リビングに戻って、最後の朝食をしていると、テラスの手作りの飯台に一羽のコガラが現れた。しばし餌を啄ばむと、さよならをするかのように一瞬こちらを眺めてから飛び去った。

八時前には山荘を後にして、鉢巻道路で小淵沢へと向かった。一帯は地元では「鹿の平」とも呼ばれている。「住み分けの橋」を渡る手前で、マコが叫んだ。

「あら、気をつけてね、鹿の親子よ」。親子づれの鹿が、唐松林の端から、道路を過ろうと窺っていたのだ。

「シカ（鹿）と了解…」と、お得意のダジャレでケンがかえす。山荘の庭に訪れていた彼らが、別れを告げてくれたのかもしれない。(完)